「正信偈」について（第十一回）

正信偈の教え上　古田和弘、正信偈のこころ限りなきいのちの詩　戸次公正、等による

みだぶほんがんねんぶ
弥陀仏本願念仏　　**弥陀仏の本願念仏は、**

じゃけんきょうまんあくしゅじょう
邪見憍慢悪衆生　　**邪見憍慢の悪衆生、**

しんぎょうじゅじじんになん
信楽受持甚以難　　**信楽受持すること、はなはだもって難し。**

なんちゅうしなんむかし
難中之難無過斯　　**難の中の難、これに過ぎたるはなし。**

［意訳］

阿弥陀仏の本願による念仏は、よこしまな考えや思い上がりの衆生にとって、信じて願って、それを保つことは、はなはだ困難である。困難なことの中の困難で、これ以上の困難はない。

「阿弥陀仏の本願念仏」といわれていますが、「仏説無量寿経」によれば、阿弥陀仏は、愚かで救い難い私たちを何とかして救いたいと願っておられます。そのようなわたしたちだからこそ、救わなければならないと願っておられるのです。この願いが「阿弥陀の本願」なのです。

阿弥陀仏は、私たち一切の衆生を、深刻な悩み苦しみからもれなく救いたいという願いから、私たちに「念仏」を施し与えられておられます。私たちには「南無阿弥陀仏」がおくり届けられているわけです。

ところが、私たちは、道理に背いた邪悪なよこしまな思い（邪見）から離れられていません。そして自ら思い上がり、他を見下して満足

する心のはたらき（憍慢）によって、阿弥陀仏が願ってくださっていることよりも、自分の思いの方を信用して大切にしています。まさに私たちは「邪見憍慢の悪衆生」なのです。

悪衆生にとっては、阿弥陀仏の本願による念仏を「信楽し受持する」ことは、甚だ困難なことであると、聖人は指摘しておられます。

「信楽」は信じて願うことです。本願によって念仏が私たちに差し向けられていることを疑わずに素直な思いで受け取らせてもらい、そして喜んで念仏を楽（ねが）い求めることです。また「受持」は受けとめて保つことです。施されている念仏をしっかりといただき、日に日にいただき続けることです。

邪見や憍慢にとりつかれている私たちにとって、本願の念仏を素直に信じて喜ぶことが甚だ困難であり、そればかりか、それは難の中の難であって、斯（これ）に過ぎた困難、つまりこれ以上の困難は無いと、聖人は教えておられるのです。

そうすると、私たちには、念仏を信ずることは、まったく不可能だということになりますが、実はそうではないのです。そのために、この後に七高僧の教えが続きますが、そこには、このような私たちだけれども、むしろ、このような私たちだからこそ、私たちの自力によらない、阿弥陀仏の本願による他力の信心が、私たちに差し向けられているのだと、親鸞聖人は述べていかれるのです。

合掌